



74
1436

慶應四年戊辰初秋

陣中手療治

隈川氏藏版



叙
能

近歲兵事連起，當其用炮轟擊，死及閃耀，兵士或被刀剗受炮疾，縱有醫在陣營，倉卒之際，或无暇受其醫療，且到邊境隔絕之地，風土不慣于體，水不宜于口，終為之困，而罹其疾苦者，亦不鮮矣。或又遇猛獸毒蛇之害，或招醫士，寒鄉僻地，寔乏其人，不啻乏醫士，併藥財亦然。當是時，非兵士自會其療法，貯其藥財，豈得能免斯危急哉。頃日隈川子行，乃至餘暇，取米國時咭氏所著兵學款府及他医籍，詳

序

述纂輯終以成冊子題曰陣中手療治言約而事
備可謂陣中楚璞矣蓋隈川氏之意欲使彼兵士
步卒免是等之疾苦也兵士各携之軍行則當其
危急裨益豈鮮書雖细小切難考述焉予喜其書成
也不顧淺陋聊弁一言於卷首慶應四年癸亥
戊辰夏六月中浣之日

南總

楓山逸史由田東撰并書

陣中手療治

凡例三則

一世ニ翻譯ノ醫書尠ナカラスト虫氏專ラ醫生
ノ為ニ譯スルモノニテ其書或ハ病因ノ議論
ヲ先ニシテ治術ヲ後ニシ或ハ卷帙浩幹ニシ
テ急卒ノ際搜索ニ便ナラス畢竟袖珍ノ書ニ
非レハ行軍ニ携フ可ラス希レニ或ハ簡便ナ
ル良本アルモ都テ醫師ノ用ニ供スルモノニ
テ醫師常ニ此書ヲ讀ミ其法ニ從テ其藥劑ヲ

處シ其患者ヲ診シテ其術ヲ施スノミ然ルニ
戦争ノ間事急起リ醫師ニ託セントスルモ其
暇アラズ或ハ田野ノ間ニテ醫師ニ乏シク是
等ノ患常ニ多ケレハ士將歩卒タリトモ畧醫
法ノ一斑ヲ知リ醫ノ手ヲ假ラスシテ躬カラ
急ヲ救フノ術ナカル可ラス是余ガ淺劣ヲ顧
ミス此小冊子ヲ譯シテ廣ク濟生ノ旨ヲ達セ
ントスル微意ナリ

一此書翻譯ノ體裁ヲ飭ラス專ラ達意ヲ主トシ

譯字ノ傍ニモ尚仮名ヲ附タルハ唯兵士ノ解
シ易カラシムヲ欲スルノミニテ是亦濟生ヲ願
フノ微意ナリ看官深クコレヲ咎ル勿レ
一書中字行ヲ一段下タシタル處ハ他ノ原書ヨ
リ抄譯シ或ハ余カ實驗ノ藥法等ヲ記セルモ
ノナリ看者宜シク本文ト相混スル勿レ

慶應四年戊辰夏六月

隈川宗悦誌

書中目録

一 藥法	一
一 蒸風呂	四
一 膏藥	五
一 沸騰散	五
一 病氣の摠論	六
一 療治の法	六
一 水に溺せしむる人の療治	七
一 蛇に咬せしむる人の療治	七

一 骨と折たる人の療治	八
一 銃創急場の療治 附陣中釣臺の事	全
一 甚しき出血の療治	十二
一 足豆の療治	十三
一 高山を越せしむる人の心得	十四
一 雪積せしむる山を通行する時の心得	十五
一 疥癬の療治	十六
一 齒の用心	全
一 渴たる人の療治	全



一 飢とる人の療治	十七
一 毒虫と刺せとるのと此の療治	全
一 中毒の療治	全
一 火傷の療治	十八
一 蚤と防ぐ法	十九
一 虱をふせく法	全
附録	
一 虎狼痢の療治	二十一
一 同く預防法	二十五

目錄終

陣中手療治

原本千八百六十四年亞米利加

スコット氏著兵學韻府

隈川宗悦 纂輯

藥法

出陣の士にハ大抵醫術と心得とるものなけれ
 は用心藥を多分貯ふるも不用ふるべし
 とも左の粉藥は必き用意をべき品なり醫師
 頼て調ふべし

一 緩吐劑 かるく吐く茶

品類 多々吐きどり吐根を最も佳とけ

一 劇吐劑 つよく吐く茶

硫酸亜鉛(即ち皓砒)を良とけ、此茶ハ多

く中毒の吐劑ハ用也

一 緩下劑 かるく下り茶

適宜き便通を得んハ臨卧ニ極上の大黃

一片を啗研て飲し且ツ心下より小腹ニ掛

け撫さるもハ翌朝快通を得べし又蓖麻子

油を貯ふるも吐ハ之を用白ると最も良

とけ

一 峻下劑 つよく下り茶

药刺巴梅那芦茶ホヤリ

一 下利後の強壯劑 下利の後ニ精合を付る茶

下利後の衰弱を強壯むる者ニ乃ち格倫

僕健質亞那幾那ホホ見ヤリ

一 机那塩解熱劑 熱をさすくもり

一 発汗劑 汗を出る茶

ドーフルス散を良とり其方吐根一厘六毛 阿芙蓉一厘六毛 霸王塩一分六リン 砂糖少シ

右調合一包とヤシ臨卧は頓服を〇但し此分量ハ一服の分量をハ此刻合して余分は調合して貯ふべし

右七種の茶は醫師の指図に任せて去きを買求め且其茶は葛粉と砂糖と毒もなかり薬にもやしめ品を調合して七種の内ハつれの薬を用るとも同ト分量にて功能行るよりよし

おく廻し先陣中のおとろきバ其分量を九筆の軸はとよて長さ六分位と定るときハ急場の時ハ小銃の火薬袋を振り出この袋ハ一杯粉薬を量て服用をきバ以つきの薬はてし丁度程よき分量なりハ
右粉薬の外ハ用意をべき品々左の如し亦亦調へざるハ
溜飲を押し薬にて菓子同やうに用るもの

一 卷木綿

万能膏

硝酸銀

毒薬なり用心をへー

おしハ曰き疵口などと擦り又ハ蛇ニ咬き
たるとき工用也

外科鍼

これハ腫物を切るに用也常工油を引き手
持よくすし

毛抜

おしハ刺と抜くは用也但一極上の品と撰

縫針

疵口と縫ふに用也

蠅引の糸

疵口をぬふに用也

藥品を入るは亜鉛より引出の箱を作り外箱
の裏にガラスの切を貼りて引出の滑らぬ様
よな引出の中は夫々の薬を以て裏表に薬の
名と記しかくべし○硫酸亜鉛を水に解せハ眼

病の妙薬なり其加減ハおれは嘗て強く洗るは
とよてよろ

陣中ハ吐剂の用意なくハ小銃一発火中の火蒸
と微温湯よて飲むべし或ハ石鹼の汁をのむも
ト又或ハ喉を搔きすもよし

蒸風呂

蒸風呂ハ諸國よて各々其法何れともハ魯西亜よ
て用る法ハ最も便利ト大カク石を焼て天幕
の真中ニ置き少しづゝおれニ水を灌けハ幕の

中ハ一面の湯氣満て甚く暖かり又一法木を焚
で其熱灰をかきひろげ其上ニ木葉を敷て病人
へブランケットやじとを着せ木葉の上ニ平卧せし
めて熱灰ニ水を振かくせば其湯氣よて摠身暖
なりへし寒氣ニ悩み人々よハ最も手輕よ
てよき療治なり

膏藥

白蠟膏ハ油と蠟と當分ニ合せとるものなり又
ハ豚の脂と蠟とよてもよし

沸騰散

炭酸曹達十二匁 酒石酸曹達二十四匁を合せて
十二包とナリ 酒石酸七匁を又十二包に分けて
此の両様を合せ用るナリ

病氣の総論

兵士の煩ふ病氣ハ熱病下利レウチク風毒等
最も多シ或ハ又陣中ニ眼病の流行をるナリ
行リ都て病人ハ少シ快方ニ赴くとキハ速ニ
其居処を易ヘ或ハ平地より山の上ニ移すべシ

め一ぎ一全快をるものナリ悪症の下痢を煩ふ
者ハ全快ニ及ぶまで何等の物も食ふべシ
唯食事のときは米の粥を少シづ用也一若
心得違て蒸餅肉類やと食ふときは僅斗ニ
ても直ニ再発一病症曰て復りて危きナリ

療治の法

近来の發明よて熱病の流行をる土地と通行
るときハキニ一手を用ひて傳染を防ぐべシ
の功能をなすと妙ナリ

河の畔の低き地面に住居する人ハ河に臨むる
山の禁に住居する人よりも流行病の毒之感
るおと少し低き土地ハ風の吹通しよきやへさ
しつらおとやう右の次才に付時候のよきとき
野陣をとらるるハ心得つらべし決して沼地の
風下陣とらるるべし陣中こねるときはたこ
き手拭と面の邊こつねおき火の近く臥そべ
かとり手拭より悪氣蒸發りて其人を害するも

のやうに毎朝早く起べし朝起をもハ
無益に空腹とやう其身も難渋すは陣中に朝
起は却てよろしうし

水に溺れし人の療治

水に溺れて以て死せし人ハすべし煖
めたる衣服をきせし床に寝せ温石を其足に當
べし枕ハ少し高き方宜し人体の温氣ハ最も功
能多し故に肥大する人二人より病人の左右に
卧し自然よきを煖むべし都て荒くしき取扱

は禁制あり

蛇に咬せたる人の療治

蛇に咬せたるときは其瘡口の上方を紐にて固く縛りて瘡口を吸ひ急は硝酸銀を附へ一若硝酸銀の持合は小刀にて瘡口乃肉を切取り鎌の込矢を通紅は焼て其端よて毒よ中よる肉を焼切るへ一元素動脈ハ表よ頭もきざりて深き処よある也へ九指の先よて撮むべき程の肉ハ切取り焼切るとも動脈ハ瘡付の心配あり

其次に心得へきふとハ無理も非道もして

病人の昏睡を防ぎ止むべし蛇毒ハ中よる人ハ大抵昏睡して斃る者おほし

骨を折る人の療治

手足の骨を折るとも肉を損るふとやむべきハ命よ別条やしさせとも骨の折せ口よて肉を突

破るときは其害恐るべし或ハ膿をもち或ハ其場所麻痺して遂よハ一命も危きふとあり故に

陣中よて骨を折るとも何れもば災しておきて

荒く取扱ふへ〜僅の痲よても大患よ
陥るべし成るべき去とかなば怪我人を其俛其
場所よおきて天幕を其所よ移し少も其休を動
うさぐるやりよをへし足の骨を折とらば其足
を上よして下の足と重ね足と足との間よ藁を
かさみ手拭よて固く足を縛り一足の如くして
おまは動く時ハ肉を破るも少

銃創急場の療治 附陣中釣臺の事

戦争の際よ兵士銃創と被くるときハ急よおま

を扶けて戦場より少隔とけたりとあろの土
手或ハ小山等の陰よて銃丸の飛来よさる処よ
うつし一先手当と施をべし此時昏盲昏睡等よ
生るるやのを先下よ卧せし先頭と休とを平
らよ居き冷水を顔面よ注きりや或ハ傍より團
扇よ急よ冷風を煽起さるべし○創処ハ唯冷
水を注きて丁寧よ洗ひ衣服の片切或ハ塵埃又
ハ火薬の粒子や創口よ残らさるや仔細よ
検査して洗脱し其処よ白木綿を創の大きよ應

陣中手療治

して割の三四倍大く三重或ハ四重ニ折りおれ
を冷水にて濡し割口よりて其上をゆるく繃帯
をべしし白木綿の持合やき時ハ手拭又ハ鉢
巻の切りて巻き其上より時々冷水を注ぎけ
始終乾きけりべし又寒中や氷西洋ハ暑
中も氷を貯へおけりの有時々ハ白木綿にて
袋を作りおき氷片を入し割処に當つればも
つとも奇効有り膏藥又ハ其他の痲藥ホ一切貼
べし内服ハ先ツモルヒ子丸一粒一日

三度用ひし若し疼痛甚し堪へず時ハ
一度小二粒ツ用ひし割口より血の出るを
多くして止らざり時ハ甚しき出血の療治の条
を参考てその法を用ふべし

モルヒ子丸

モルヒ子 一分六厘

麵粉 一匁

右百粒の丸薬とみ常ニ用意しおくべし
右の如く急場の手當を施しその後病院或ハ
陣營に移して鑿師の療治を受べし歩行出来

陣中手療治

さるほとの怪我人かれハ陣用釣臺(後)圖説
 陣中より怪我人又ハ病人を他の場所へ移し遣
 らんまハ左の如き釣臺と用意する
 且便利なり其造法ハ大夫より九太二本を長さ
 八尺許り切りてふたる病人の左右に並
 べ長さ二尺五寸位の横棧を三ヶ所結付其形
 ち梯子の如くなりし扱その載方ハコランケ
 ト又ハ蒲團等の上は怪我人病人の卧しとるま

此梯子を其人ハ障害なき様氣をつけ卧たる
 上へ持きたりコランケト又ハ蒲團等の両縁を
 梯子へよく綴付し梯子の両先へ紐を付し其
 上へ肩小荷より但し横棧の位置ハ首と足の
 先一本ハ一寸一本ハ丁度腹部の処へつけ
 様よすべきなり右の法にて怪我人病人を持運
 るにゆへ其もの為小害なく且便利なり
 りをもち此法を用ひしハアメリカの土

人よて戦場へ用意

せいのものやうに

今ハ合衆國よても

急場よ便利なりと以て

あつてふとを由と

その因斯の如し



西本正衛圖書

甚しき出血の療治

深き疵口より絶間なく血の流出るものは格別

心配するよも及たせせしと血の出るよ呼吸を

つきて飛出て且其色鮮紅赤きは巻木綿かよ

て変りて防止むへう斯く鮮血の飛出るハ

動脈といふものよ疵付たるものや其脈を

むきも出系よて結むききは本法の療治叶ひ

難しきせしと陣中よ手近く其療治心得し醫師

あつハ蛇よ咬せしときと同一仕方し錢のこ

矢を焼き深く其疵口一突込むら又ハ熱油を
れ一灌込むし固より此療治ハ如何も手荒
き仕方にて且弥功能のやも請合難しといひ
へとも人命易へかへ若し首尾よく出血を
防止めあハ其手よても足よても変じて動
たしく高く上て且冷をもち一りへし初療治
と加るとき一時出血を止るハ革の紐り又は
手拭よて疵口の上の方を縛り尚又棒を挿て
を捻り大夫夫よ一先付べし斯其場所と縛る

訳ハ手足は血の通ふ動脈を押んとし趣意
ルハ脈のつる処を心得る人ハ脈筋と思
処へ小石を置き其上を手拭よて縛るハ大抵
動脈のつる処ハ筒袖だん袋の内側の縫目の
に當り心得べし
甚しき出血ハ本文の如く療治を加ふ可き
れどもさほど甚しくもなせば余り手荒
法も及なり其時ハ止血薬を用ふべし其方
ハサルマルチス薬店よ水を水よとらし濃厚

綿撒糸或ハ綿ニ濕シテ血ヲ出口ニ付
ベシ甚効アリ又出陣の時此糸を製ハ乾ク
て貯ヒ置ケハ急場ノのそんで最便利アリ

足豆乃療治

夜床ニ就ク前ニ蠟燭ノ蠟を掌ニ持テ
和せて此糸を足ニ塗ルバ翌朝必ク癒セ
癒セ功能ハ唯燒酎許リナルドモ此蠟を交
ルハ足の皮を柔クせん為ナリ此療治ハカピ
タンコチエラシといへる人の發明セ
奇法ニ

て歩行をる人ハ必ク心得へし足豆の出来さる
やうニ用心の法ハ履下の足袋(西洋のメリヤス
足袋)をもくとき足袋の裏ニ石鹸を拵付テ一面
ニ泡の行届クヤリニふし履の革を柔ク
暫時歩行して足ニ痛を覺え
右と左と着換ヒ一
方ノ足ノ痛ハ
足袋を裏返して
高山を越るとき
心得

高山を越るときハ何と云ハ苦痛を覺由南ア

リカよてハたれを「ナ」といふ其甚たしきよて
 りてハ倔強の男よても堪難し其苦痛は堪え
 るは唯人類のいふれり獣類も同様よて殊に猫
 ハあせよ苦むたると最も甚たしドクトル・チクダ
 人のいへるよは海面より高きたると千三百丈の
 處へ猫を連行けハ直よ死れり
 高山よ登りて覺る苦痛は眩暈耳鳴頭痛氣絶目
 口鼻より血流出で其氣分のいふれり甚たし恰も船
 酔いしときめ如し山よ登るたると九千二百丈

より千三百丈の処よて始て苦を知る殊に風吹
 くときハ其苦痛常より甚とし旅慣れたる人
 ハ歩行の草臥と「ナ」の苦痛とを相混むるたると
 何れとも大よ相遠り「ナ」の苦痛ハ速し山を
 下りて時刻の過るを待より外に療治の法あり
 富士山の絶頂海面より高きたると千四百十七
 丈七尺
 箱根山の湖水海面より高きたると六百二十五
 丈

陸軍省

右は先年英國の「ニストル」アルコックと
ふ人富士に登山せしとき測量せしものなり

雪積山を通行する時の心得

雪積りくる曠野を通行する時ハ青硝子の目鏡
を用ゆべき筈なれども陣中ハ其用意も乏る
まじきやせハアソリカ北國にて土民等の専ら
用る似寄の品を作るべし其法柔くヤシ木を切
り中一寸五六分長さは両眼を塞ぐ位にあつて面
の形に削成して鼻より通る処を少く欠き左

右一文字は鋸の切目を入せ

おそと糸よて耳に掛け目鏡の

形その形状図の如しとせん

ちの目鏡を掛る人ハ

一文字の切目より外の

ものを見るた自由なりとせし

雪の光の目よ入るハ甚少



車中手察台

癩癬の療治

癩癬を煩ふ人の野菜のミを食して全快及ぶ
べー又石灰の水下品の砂糖酸味の菓実生芋
どもよしドクトルケインの説は癩癬の病人は
生の肉を食して奇妙な功能有りといへり

齒の用心

齒切きの何れも食物を食せんとせば先づ齒医
師を招くべしとの諺有り用心をべし
渴たる人の療治

久しく水を飲まざりて渴たる人へ療治を施し
よハ先づ其衣服より水を濯ぎ十分よ体を湿し
き暫時の間水をのまらばなるべし渴
するものへ水を與へざるは如何にもむかひ思
えられとも固く禁し與ふべし渴は苦
むかひ極めてもあまじからざる者ハ七よて
少しづき水をせよさあは上頸をぬらし之よて
次第に渴を止め腹中の機関を損するおとあ
るべし

飢たる人の療治

一時の間（一時的に）七八度も一口つゝ食物を共（共に）山へー
其食物ハ肉の煎汁（肉の汁）おともつともよろし

毒虫（毒虫）に刺きたるとき（刺された時）の療治

毒虫（毒虫）よさゝれ（ささる）るときハ烟管（煙管）より烟草（烟草）のやよ
をうち出（出さす）してこれ（これ）つかべし（つかう）も（も）その毒（毒）をか
ちこ（ちこ）けせば蛇（蛇）は咬（咬む）せしときとおかじ（おかし）療治（療治）を
施（施す）さざるへ（へ）い（い）り

中毒（中毒）の療治

毒を食（食）て中（中）てられ（ら）るときハ刺（刺）しき吐（吐）劑（劑）をの

いその毒の体内（体内）に廻（廻）らさる中（中）に吐（吐）き出（出）す

吐劑（吐劑）の有合（有合）あくハ石鹼（石鹼）の汁（汁）又ハ火藥（火藥）分

量前（量前）に吐（吐）き出（出）つを飲（飲）むべし腹痛（腹痛）甚（甚）た（た）く尚（尚）嘔氣（嘔氣）の

らハ沢山（沢山）のんて頻（頻）りに吐（吐）く（く）一（一）既（既）に胃中（胃中）の

ものを吐（吐）きつくせハ其（其）余（余）ハ唯（唯）体内（体内）に廻（廻）りし

る毒（毒）の働（働）を防（防）ぐの（の）病人（病人）の足（足）厥（厥）冷（冷）して志（志）ひル

おハ温石（温石）を足（足）の先（先）に（に）着（着）物を（を）うけ（て）摠（摠）身を（を）

暖（暖）むべし若（若）し昏睡（昏睡）を催（催）し氣重（氣重）く（く）て夢中（夢中）の如（如）

くまは焼酎を飲ませて睡をさすべしあの外りも為をなすをかし唯自然に任まるとい

火傷の療治

近来ハ多く銃器を用ゆるが故に火薬又ハ兵火の為ニ火傷を患ふ者少なき然る時ハ唐の土(官粉ともいふ)即ち炭酸青化塩(適宜に亞麻仁油若し品物あまき時ハ胡麻の油を以て代用をなす)四倍を和し濃厚にかきつけぬを筆或ハもけの糞にて一日二三度も撒きその上を

綿或ハ他の軟かなる物にて覆ひ且適宜に繃帯をいすなり一〇火傷の部は水泡をなせハ外科針を刺しその水泡を潰さず水液を漏らして後ハの薬を引くべし

蚕を防ぐ法

印度にて製する蚕除といふ粉薬ありて西洋諸國よとたせを賣るものありハの薬ハ印度の國に産する蚕豆と唱ふる豆の粉にて蚕を防ぐ妙薬なり出陣のときたせを買て用意をべし

虱と防く法

出陣ウツトのとき着替きかたる一枚いちまいの着物きものを四五十日しゅうじゅうにちも
 着きつゝくもハ昼夜しゅうやとも搥身こしん痒かゆくして何なんら氣惡きあく
 一いちハ虱ししの出来できたるは相透あうとうな一いち支那しな鞆靴たづねの人ひと
 一いち体ていは虱ししを付つけて平氣へいきあるとと西洋人せいやうじんはハ
 を恐おそろふと甚し一いち扱あちの虱ししを防ぼうくの法ほうハ恥ちか
 一いちかたしは支那人しなじんのすねをすねして先まづ用意よういの水みづ
 銀ぎんと取出とり古茶こちやを啣くは碎くだきて餅もちのやうやうににかしし四
 及および許ゆるりの水銀スイギンをすれれはかきかませ頻しばしばはたしを搗う

まあせをすねすますてて水銀スイギンの星たのややくくああららや
 ううまませせば棟葉とうやの如ごとききの出来できををべべし若わ一いち其
 棟葉とうやとくば唾つばを和やせて柔やわくく水みづよよてハ
 功こう能のう一いち斯棟葉とうやの出来できと上うへへ木綿もめんの切きせ
 を緩ゆるく捻ひねりててああせせは摺すり付つけ首くびの周圍まわりは巻まくくべ
 一いち虱ししのああせせは觸ふるものハ忽たちち腫はれ赤色あかいろはあり
 て死しをし出陣中ウツトナカハ一月いちげつは一度いちどづづももららの首卷くびまきを
 とり換かゆゆべべ一

陣中手療治

陣中手療治終

陣中手療治附録

陣中^{じんちゆう}に在^ありてハ群居^{ぐんきよ}雜卧^{ざつが}一^{いっ}或^{ある}ハ飲食^{おんじき}の養^{やしな}ひ
 寒暑^{かんしよ}の凌^{しの}ぎも共^{とも}よその宜^{よろ}きを得^えり身体^{しんたい}常^{つね}に
 健全^{けんぜん}ありさう以^{もつ}て其流行^{きりゅう}病^{びやう}は罹^かるとも亦
 易^{やす}に殊^{こと}よゴロリ病^{びやう}等の流行^{りゅうこう}する時^{とき}ハ必^{かならず}りた
 の病^{びやう}を患^あはれざる論^{ろん}を俟^{まち}たり然^{しか}るるときハ許^{ゆる}多^く
 の人^{ひと}やせハ醫士^{いし}も悉^{しつ}く之^{これ}を治^{ちやう}療^{りやう}を施^せるも
 暇^{いとま}有りて遂^{つい}よハ十日^{じふにち}之^{これ}前^{まへ}とヤリ癒^いはさるべき病^{びやう}
 人も死^しに至^{いた}ると多^{おほ}く故^{ゆゑ}に出陣^{しゅつじん}の士^したるもの

陣中手療治

斯病の療法を知らざれば、因て今その
療法の一斑を録して、卷尾に附し、普く海内乃
兵士に示さんとし、

虎狼痢の療治

微候 俄に腹痛し或は疼むくして水瀉り且嘔
吐きて直に瘦衰眼陷し聲啞れ四肢厥冷あり心
下煩悶病重きものハ皮膚珠し手足の皮を搦て
其扨みたる痕の皴裂速に復故らげ足脚轉筋劇
しく渴ひて小便不利或ハ閉塞り皮膚枯燥て摠

身蒼色となり脈小疾或ハ手足忘せり等の症全
く備はる者ハ一二時の間に死するものなりハ
用心をすべし

治法 此病腹痛りて吐瀉り其瀉る處の物稀
薄米汁の如くなり初發して吐瀉二三度の間に
ハ先づ少く熱湯に芥子二握許を入れて半
身浴を施し其浴中腰の周圍にブランケット或ハ
衣服亦を巻きて風を冒たさるやうに發汗を
促りて其浴終らハ直に蓐中に卧せしめ其後

吐瀉数度よりいりたばモルヒ子丸 錠創の部一
 時より一粒フ、二三度も用ひて動静を窺ひ尚不
 下利止まりて四肢厥冷なり 眼陷し声啞る
 ものハコレラ丁幾と云水薬 製法用法を共へ或
 ハキナ塩 六厘とモルヒ子丸 粒を研和して砂糖を
 加へ六包とす 一時一包 共ちも一湯も
 下利止まりて吐止まりて甚しき薬汁も嘔
 下こと能はすものハ沸騰散 薬法の用ひ

て良切なり是等の薬を用て四支温うよ成り吐
 瀉や小便快通むハ是快復し趣くの徴なり
 直よ是等の薬を止めて先づ米粥汁又ハ片栗湯
 ホを少く 共へて自然を待つへ

烏頭 六枚 阿芙蓉 三枚 芦荟 二枚
 アルコール 十八枚 燒酒ヲ代用スベシ
 右調合し細口のビンに盛り浸し出を七日
 許りふして渣を去り貯へおくべし用法ハ大

人ウレハ廿五滴より三十滴小児ウレハ五滴
より十五滴までと茶或ハ水一口許ニ滴一病
軽重ニ應じて用カヘ

右の如く諸薬を用て少しも効ふく四肢尚ハ厥
冷と以前の如くふくハ再ハ半身浴を施一或ハ
芥子泥製法次を手足又ハ腹部小貼り或ハ温
熱砂囊製法次を作て摠身若くハ唯脊の両
側を温め或又艾灸を腹部小施るホの外治法を
行ふべし是等の法ハ何症のゴロリ小用也ると

も害ホヤリトホ

温熱砂囊製法

炎暑の熱氣よて焼く如く焚くヤリとる砂
或ハ熱灰等を取り木綿袋ニ入せ又其上を木
綿切或ハ手拭ホよて包み適宜の温氣とけ

芥子泥製法

芥子一合計り 麵粉五口計り

右醋或ハ湯ふてねり木綿切又ハ厚き紙この

へて用カベ

又此病腹痛なく吐氣なく氣色平常に異なること
 ありて俄に水瀉し瀉後却て怪快を覺ゆるは
 のり交りて由断をへり唯瀉る處の物稀
 薄米汁の如きを以て此病とるとを知るゆゑ如
 斯症は初発よりモルヒ子丸或ハコレラ丁幾
 を用ひ半身浴を施して間奇功あり
 或又此病吐瀉なく俄に顔良瘦削て蒼色とるは
 眼陷四肢厥冷なり煩悶するものなり此症は
 ハ先づ吐劑を出つて用て必り吐出さしめ其のち

半身浴温熱砂囊をもつて摠身を温め且芥子泥
 を諸部貼り艾灸を腹部貼り内服はハキニ
 一子竜腦麝香薄荷油等を用ゆべし是等の藥ハ
 病の輕重小由りて大小分量の差等ありしハ預め
 定め難し

吐劑
 吐根一分三厘 吐酒石 三厘 砂糖 適宜
 右調合研和して一度は用ゆべし ○肉汁雞卵黃
 砂糖水等を和て適宜は用ゆべしハ吐出し易く

して且滋養とふれり
右は拳くる処の諸法方行ひ一旦の危急を救
ふて後ハ宜く医師に就て其療治を請へ一元素
此病ハ回復期の治法甚むつう一きものやせバ
少しも由断をべうり

コロリ病を預防法

此病を預め防がんよハ平生の授生を中たり其
流行をる時ハ當て急よ常習を改むるふれ且
日中炎熱の操作を避け殊よ労働過度よいよる

正に慎み平生習慣さる飲食或ハ難化の食物不
熟の菓実を禁し居室を用ひて清凉新鮮しき空
氣を普く通せし身休安逸ありしむるを肝要

市中街道或ハ溝渥等をて汚物なきやうはし殊
は戦場ハ死骸の腐せるもの多しせハよし
注意をへ

コロリ病流行ハ神思安逸あり常よ恐を懐
くが故よ神至よ妨げをふし終よ食物の消化を

妨けの病を導くの原因とあり故は流行
 する甚しくも変じて恐るとなく唯害物の
 を禁し寒冒ホセざるやうに注意し夜間ハ眠の
 時限を定め成丈け宵間はいね必しも夜を闌う
 りへうし又此病既は流行する時通常の下利
 を患らハ速く慎んで治療をべし何者下利症
 よりコロリ病は変ざるの恐り故なり

陣中手療治附録終



